

家老知行地の支配構造

——知行制の構造と展開(Ⅲ)——

隼 田 嘉 彦

1. はじめに
2. 知行所の概要
3. 知行所の支配機構
 - A. 陪臣団の構成
 - B. 給人(=家老)の知行所支配
 - C. 郡役所(=藩)の知行所支配
 - D. 小 括
4. むすびにかえて

1. は じ め に

本稿の目的は、広島藩を素材として、家老知行地における支配構造及びその特質を、できるだけ詳細に提示し検討することにある。¹⁾ 2・3の旧稿でも若干触れておいたように、広島藩の家老知行地は、存在形態や支配機構において、一般家中の知行地(=小給知)に比べさまざまな特質を有している。小給知が分散相給形態であり、度々割替えが行なわれたのに対して、家老知行地は地域的に集中して存在し、かつ一村丸給知が多く、寛永期の知行地確定以降は「永代不変」とされて割替えられることはなかった。また小給知が郡役所をとうして藩の一般の支配をうけたのに対して、家老知行地は郡役所のほかに、むしろそれ以上に家老独自の支配機関たる、いわゆる村方役所の支配が大巾に及んでいることなどが、その特質として指摘される。

これらをふまえて本稿では、家老知行地の支配機構と現実の支配形態を明らかにすることを当面の課題としている。このことは家老(=給人)による知行地支配の貫徹度如何ということにはほかならないが、同時に家老知行地に対して、藩の支配がどの程度まで及んでいたかということでは

もある。とすれば、当然のことではあるが、いわゆる給人知行権が問題とされざるをえないであろう。

幕藩体制社会においては、結局は将軍が全封建的土地所有者ということであろうが、そのもとにおける、大名知行権・旗本知行権・給人知行権などという場合、本稿に即していえば、給人知行権として一括する以前に、それなりの手続きが必要であるとわたくしは考えている。つまり家老とそれ以下の家中の知行地支配を、まず区別して検討すべきであるということである。とりわけ広島藩のように、両者に画然として差異が認められる場合は、このことが特に必要であると思われる。そうすることによって初めて、給人知行権を明確にすることができるのではあるまいか。給人知行権として一般化する以前に、家老知行地の支配構造を考察しようとする所以である。

ところで広島藩の家老知行地に論及したものとしてわれわれは、わずかに山中寿夫氏のお仕事とふたつの『市史』（註1）をみよ）をもつにすぎない。山中氏は直接に家老知行地を分析の対象とされたわけではないが、小給知との差異という観点から、次のようにまとめておられる（同上p.43, 原文のまま引用）。

「家老給知一石高四十二万八千石のうち五、七万石にのぼる三家老の給知は、その一員上田氏についてみると、次のごとくもっとも強く地方知行の形態を存じていた。

①給知所は浅野氏の広島入国以来不変であった。

②所当知行について、すなわち免の決定、年貢の上納期限などは、蔵入地とはちがっていた。

（寛政二年御用向日記）

③下地知行の一部というべき知行地の百姓に対する裁判権も存していた。（寛政四年より七年迄上田家記録）

④新開の築調、検地などの場合には、郡の代官、勘定奉行と密接な連絡をとっていた。（享和二年御用向日記）

⑤山林の支配については、明らかでないが、木炭などの積出を握っている点から、或程度には用益権が与えられたことと思われる。（安政三年御用向日記）

要するに、家老給知は、次のべる一般藩士の小給知とはちがって、地方知行の形態が強く残されていたのである。」

指摘された限りでいえば、①を除いてさしあたり異議をさしはさむべきものはない。しかしこのほかにも、知行権の内容を示す豊かな問題があるのであり、これらを一層深めてゆく必要があるかと思われる。

『大竹市史』は、「史料編」にもその片鱗が窺われる豊富な史料に基づいて、村方役所・米蔵・炭蔵・大坂蔵屋敷などがあったこと、頭庄屋のこと、また「貢租に関しては、給主——知行所奉行——知行所代官——頭庄屋——庄屋の組織によって統制されていた」（p.161）ことなど、多くの諸事実が指摘されている。しかし何分にも『市史』の一部として叙述されていることもあってか、上述したような観点に欠ける憾みが残し、支配系統に「貢租に関しては」という限定をつけられ

ていることにも、にわかには賛成しえないものがある。

また『新修広島市史』は、対象が異なっているために立ち入った考察がなされず、藩制史のうえで概括的に触れられるにとどまっているようである。

このようにみると、家老知行地については、あまり明らかにされたとはいえない状況であるといわざるをえないもののようである。このことはまた、広島藩のみでなく諸藩についてもほぼ同じような状態にあるといえるのではないだろうか。このような認識からわれわれは、上述の問題²⁾ 関心乃至観点に基づき、家老知行地についていささかの検討を加えようとするものである。³⁾

なお主として史料上の制約によるが、次の二点について予めお断りしておきたい。第一に三家老の1人上田氏の知行所、そのなかでもとりわけ佐伯郡が考察の中心におかれること⁴⁾、したがって三原浅野氏・東城浅野氏については補足的な言及にとどまり、ことに前者にはほとんど触れることができなかったことである。第二点は、たとえば村方役所の機構の部分などにみられるように、全時期を一括して把えざるをえなかったこと、そのために支配機構の変化・展開また諸画期如何⁵⁾ というような視点を、ほとんど持ち込みえなかったことである。

〔注〕

- 1) 本稿は拙稿「広島藩地方知行制の基礎的考察——知行制の構造と展開（Ⅰ）——」（『広島文教女子大学研究紀要』5号）において、「家老知行地における支配と農民の動向」として予告したものを、表題のように改題したもの。なお家老知行地については、山中寿夫氏「地方知行の残存形態」（『社会科教育・歴史・地理研究論集』）、「新修広島市史」第二編、「大竹市史」第一巻などが先行のお仕事である。筆者も2・3の旧稿で若干関説したことがあるが（上掲「基礎的考察」をみよ）、不十分であるために本稿を草した。なお『大竹市史』の史料編（第一・二巻）は、家老知行地を検討するうえで不可欠の文献であり、本稿もこれに負うところが大きい。
- 2) 林薫一氏『尾張藩の給知行制』はその少ないもののひとつである。
- 3) それ故、以下においていちいち家老知行地と断わるのも煩雑であり、史料的にも「知行所」とされていることが多いので、知行所とのみ記すこともある。本稿に関する限り、単に知行所というのはすべて家老知行地の謂である。
- 4) 佐伯郡関係の史料の引用について一言しておく。『大竹市史』の史料編に多くの史料が収録されているので、あるいは検討して下さる方のあることを願い、同一史料がある場合には、できるだけ（『市史』p.100）のごとく註記し、また同書からのみの引用史料はその旨記した。
- 5) 本稿で使用する史料は、ほとんど学生時代に蒐集したものである。それきり放置していたわけであるが、この機会に史料閲覧を許されたすべての方々、及び本稿の中心史料となっている大竹市小方町 和田世弘氏所蔵文書（以下和田文書と称する）の閲覧に多大の便宜をはかって下さり、また古文書撮影の手ほどきまでしていただいた、当時大竹市史編纂委員の末永栄氏に改めて深謝するものである。

2. 知行所の概要

まず旧稿と重複しない程度において、知行所の概要を述べておく。普通三家老と呼びならわしているが、元和5年10月、家老への知行割が行なわれたときは、浅野知近（三次3万石）、浅野忠吉（三原2万8,000石）、上田重安（小方1万石）、亀田高綱（東城7,000石）の4人であった。

ところがこの知行割に不満をもった浅野知近がただちに誅せられ、亀田高綱も国を去ったために、代わって浅野高英が東城を賜わって家老に列せられ、こののち加増や部分的な替知が行なわれたのち、寛永18年以降三家老家として固定した。

この間の事情を簡単に述べておく。¹⁾浅野忠吉は長政の従弟で、大津に出仕し「国老」となり、甲斐時代に2万石を宛行われ、紀州では2万8,000石に加増され新宮を賜わった。元和6年2,000石を加増されたが、翌7年に卒し、跡は忠長が継いでいる。上田^(主木)重安は信州上田に出ずるといい、丹羽長秀・豊臣秀吉(越前1万石)・蜂須賀正勝らに仕えたが、やがて紀州で幸長に出仕した。幸長の死後剃髪して宗固と号し奈良に蟄居していたが、長晟に召還されて帰参、「老臣」を以て遇されたという。寛永11年7,000石加増されている。なお知行判物からみると、この両家の知行所は寛永11年以降固定化されたようである。浅野高英は父高勝の旧姓が堀田氏であったので、堀田

表1 家老知行所の分布

国	郡	三 原 浅 野				上 田				東 城 浅 野			
		元和 6 年		寛永 11 年		元和 6 年		寛永 11 年		寛永 11 年		寛永 18 年	
		村数	石 高	村数	石 高	村数	石 高	村数	石 高	村数	石 高	村数	石 高
安 芸	安 南 (安芸)		石		石		石	1	1,081.520	2	247.666	2(1)	199.395
	安 北 (高宮)	2	1,067.950	2	1,067.950			1	1,000.820	1	103.207	3 [2]	238.207
	豊 田			5 (1)	4,698.180			3 (2)	1,210.832	2 (2)	718.597	1(1)	318.597
	佐 西 (佐伯)					18	4,823.587	21	8,395.047	5	3,121.357	6 [3]	3,190.682
	高 田							3 (2)	878.132			3 [3]	195.000
	山 県											2 [2]	130.000
備 後	賀 茂											3 [3]	361.905
	御 調	22	9,040.679	23	9,901.095								
	甲 奴	8	4,513.448	8	4,513.448								
	世 羅							2	969.204	5 (1)	3,099.792	5(1)	2,845.173
	三 谿			1	216.715			1 (1)	179.417				
	奴 可			4	3,251.278			4	2,351.859	2	710.305	7 (2) [1]	2,521.965
計	三 上	8	5,744.520	9	6,352.428			1	949.392				
	恵 蘇	6	6,868.742			5	5,193.266						
	三 吉 (三次)	9	2,765.754										
計		55	30,001.090	52 (1)	30,001.095	23	10,016.853	37 (5)	17,016.223	17 (3)	8,000.924	32 (5) [4]	10,000.924

① 浅野長武氏編「浅野家関係文書」巻4・5, 「大竹市史」史料編巻1にて作成。

② () 内は村数の内の入会知行地, □内は同じく「与力知」を示す。

③ 数値が若干合わないところもあるが、いずれも史料の記載に従った。

浅野氏とも称する。高勝は明智光秀の家臣であったが、天正10年末浅野長政に仕官し、当時7才の幸長に付けられた。同18年浅野の称号を賜わり、文禄3年2,500石、慶長5年5,000石と加増され、紀州では8,000石を賜わったが、慶長18年死去し、高英が跡を継いだ。高英は広島入封時6,000石、寛永5年2,000石加増されて8,000石、同18年に「与力知」2,000石を付けられて1万石となった。

要するに浅野一族は忠吉系のみであり、他2家は新たに仕・召抱えられたものである。長晟の知行判物などからみても、かれらはあくまで家老であり、小方1万7,000石などといっても決して支藩のようなものではないこと、いわんや在地性のごときものは最初からなかったことなどを、注意しておく必要がある。

次に固定化前後の知行所分布を概観しておこう（表1）。三原浅野氏・上田氏に典型的にみられるように、それぞれ御調郡・佐伯郡への集中度の高いことがまず指摘される。東城浅野氏の知行所はかなり散在し、知行所高も東城町（川西村の内）の所在する奴可郡より世羅郡の方が多く、これは遅れて家老になったためと思われる。三原浅野氏・上田氏ともに、元和6年の恵蘇・三次郡の知行所が寛永11年に消滅しているのは、同9年にこの両郡を中心に三次支藩5万石を分封したので、他郡へ替知されたためであるが、三次支藩の本藩還付後も寛永11年のものに変動はない。東城浅野氏の「与力知」というのは、寛永18年4月15日高英が東城を拝領したとき、家中のなかから知行180石のもの3人、150石のもの7人、「^(高英)摂津守家来」の2人を50石加増して与力としたもので、「^(高英)全自分家来之通に召仕、其後御判物替候得共、代々壹万石無相違下置」かれたものである。³⁾家老就任に伴い格式や軍役上の必要から、「与力」として付けられたものと考えられる。

入国当初およびこの表にみられるような家老配置は、軍事上の目的から初期には広く採用されていたことは周知の事実であるが、浅野氏も先述のように紀州時代すでに採用しており、この地域でいえば、福島正則が尾関正勝を三次に、長尾一勝を東城に、仙石但馬を三原に、また福島伯耆を小方城におらしめたことなどの踏襲である。一国一城令によって、三原城のみ残され小方城などはすでに破壊されていたが、要するに藩境守護のために家老を配備したことは疑いない。⁴⁾東城は知行所高が少ないといったが、地域としては枢要の地であり、19世紀に入っても、「ここは（東城一筆者）、浅野孫左衛門、与力、並びに其家士を置き、藩の東疆を守る」（『芸藩通志』巻117）とされていることから明らかである。各郡に1～2村ずつ飛び離れて知行所が存在する理由は、もし技術的なもの以上のことが考えられるとすれば、小給知の場合、たとえ100石の給人であっても、2郡以上に分けて宛行われているので、この方針と軌を一にするものとみられるものがある。

さて本稿は、佐伯郡の上田家知行所を中心に考察するので、次に同郡における知行所の位置づけを行っておこう。表1の如く、上田氏は当初佐伯・恵蘇2郡に知行所を宛行われており、知行所高からみると、大村であることもあって恵蘇郡の方が多く、佐伯郡中心ともいえないほどである。寛永11年佐伯郡に宮内・吉和村などの大村——2村で3,500石余——が加えられる（他は不変）とともに、恵蘇郡に相当する部分が数郡に散在させられ、名実ともに佐伯郡中心の知行所

となったのである。これらの知行所は大きく二分して支配され、佐伯郡の知行所を西方知行所、他郡の知行所を総称して東方知行所といい、それぞれがひとつの支配単位とされた（後述）。

分布はすでに示したことがあるので結論だけ述べると、上田氏の知行所は佐伯郡の西部（＝広島藩の西端）に集中し、石見・周防国境 8 ヶ村のうち 7 ヶ村を占める。また小方・大竹・木野・大栗林・浅原村の 5 ヶ村を、「御城附五ヶ村」といい、また「御境五ヶ村トモ」いうが、近世初期には城付五ヶ村は意味をもっていたけれども、文化ころには単に「由緒有ル事也」といわれるのみにいたり、すでに「城付村」としての実質的意義を失っていたとみられるものがあり、この点については三原浅野氏との差異は明らかである。蔵入地は廿日市・五日市・草津などの町場、己斐から地御前に至る城下に近い山陽道沿い、また水軍乃至加子役徴発の関係から能美島全域 16 ヶ村など、枢要とみられる地を占めていた。内陸部ではいわゆる水内庄 4 ヶ村（麦谷・下・菅沢・和田村）が飛び離れていたが、この地には湯の山温泉があり、湯所役人も任命され歴代藩主も湯治に行っている⁷⁾ので、このような関係から蔵入地とされたのであろうと考えておく。したがって東城浅野氏の知行所および小給知は、この他の地域に存在したことになる。

表 2 によると B/A つまり平均石盛にはほとんど差が認められない。注目されるのは新開高および D/B である。上田氏・東城浅野氏ともに「郡辻惣高エ結び不申」の新開があり、それぞれ知行所高の 5 パーセントを越える⁸⁾。小給知の新開は残らず明知方とされ、たとえ知行地内の新開であっても、決して給人の宰領に任されることはない⁹⁾。これに対して家老知行地は、「…（前略）…を新開といふ、御拝領田畑之外なり…（中略）…御家老衆ハ先年已来追々新開を出し知行之外之徳益も有事なり」といわれるように、年貢も家老の元へ納入されていた¹⁰⁾。そのために上田氏は知行所における新開築調に努力し、色々と援助も行なっており、表 2 の差はこのことの表現である。なお土地に関しては、「上田様御入用ニ付永代ニ御買上ヶ被下」の如く、上田氏が知行所から畑地（多分新畑）を購入している事実、また川角村に東城浅野氏の「手作地」がある事実など、

表 2 佐伯郡の畝高・石高

区 分	古 地		新 開		毛 付 高		B/A	D/B	F/B+D
	畝高 A	石高 B	畝高 C	石高 D	畝高 E	石高 F			
蔵 入 地	町反畝歩 1285,1,9,16	石 12023.2296	町反畝歩 69,0,9,16	石 390.6294	町反畝歩 ?	石 ?	0.936	3.2	?
小給知・明知	1299,2,8,14	13594.091	2,5,7,24	11.4775	?	?	1.046	0.08	?
上田知行所	829,6,0,27	8395.047	(※2) 59,8,1,15	425.231	?	?	1.012	5.1	?
東城浅野知行所	274,1,7,03	(※1) 2960.682	(※3) 15,7,0,18	166.347	?	?	1.080	5.6	?
計 (平均)	3688,2,6,00	36973.0496	147,1,9,13	993.6849	3182,4,3,02	30041.3262	1.002	2.7	79.1

注① 『大竹市史』史料編第 2 巻所収「文政 2 年国郡志御用ニ付郡辻書出帳」により作成

② ※1 「与力知」を除いた石高

※2 「上田主水様御知行新開郡辻惣高エ結び不申分」とある。

※3 「浅野孫左衛門御知行所新開右同断」とある。

いずれも興味深いことと思われるが、内容を今のところ詳かにしない。

次節が村方役所を中心に述べられるので、これに包括しにくい2・3の点に予め触れておく。まず山林・藪の支配である。佐伯郡には藩の御建山などのほかに、上田氏の御建山・御留山・御留藪が各々20ヶ所・4ヶ所・11ヶ所「上田主水様御分御知行所村々ニ有」り、東城浅野氏の御留山も7ヶ所あった。¹⁴⁾これらの管理には上田氏が任命した山守が当たり、その給米は「御屋敷様」すなわち上田氏が給するところであった。このような山支配は、三原浅野氏の御調郡でも、東城浅野氏の安芸郡川角村でも認められる。¹⁵⁾小給知はたとえ一村丸給知であっても、給人は山支配と一切無関係であることをみれば、家老知行地における山支配はひとつの特質として指摘されよう。

紙の生産と流通の支配も注目される。¹⁶⁾広島藩では紙は「御紙蔵」の支配下にあり、藩の専売制となっていたが、それとは一応別に上田氏の知行所でも生産され、その宰領によって大坂積登しも行なわれていた。「上田様御知行所…(中略)…此十三ヶ村者白紙漉立、御給主様エ上納も仕、尚年中莖紙重之産業ニ仕、…(中略)…此四ヶ村者小皮反古類諸方ニ買集メ莖紙漉出し上方諸方エ積出し候儀夥敷」く、事実九州まで反古類を買集めに行ったものもあり、紙漉人も藩支配下の17村 1,220人に対し、18村 3,026人を数えている。その支配は元禄13年すなわちいわゆる「知行地戻し」以後上田氏に移ったといわれ、「御紙方」(乃至「紙方役所」)のもと、小方村に紙見取役所・紙蔵がおかれ、「御紙方」は知行所へさまざまな触(いわゆる給人法)を下していた。頭取役・元役・目付役・御判役・貫数改役などの任免、中買株の免許などまで「御給主様御紙方ニ被仰付」れ、また「仕入銀貸附」も行なわれていた。知行所からは年々寸志銀が上田氏へ上納され、また大坂には加島屋・泉屋などの「塵紙蔵元」があり、ここへ知行所の船で積登していた。ただ紙の種類にある程度の区別はあったらしく、藩の方は「上品」すなわち上質紙が中心で、上田氏の知行所では主として塵紙などの日常品を生産していたもののようである。東城浅野氏も「浅野孫左衛門様御下タ古江村之楮者御同方御給知所玖鳴村之内ニ而白紙ニ漉立上納仕来」といわれるごとく、一定の支配が行なわれていたことは明らかである。小給知における紙は、藩の「御紙蔵」支配下におかれていたことはいうまでもない。

次に年貢について。¹⁷⁾年貢は知行所から直接上田氏へ上納していたことは、余りにも明らかな事実であるので、わざわざ述べることもないように思えるが、近世の地方知行制は名目のみで、その実蔵米取りと同じであるという考えもなくはないようなので、念のため一言しておく。免の決定権は上田氏がもち、年貢米は寛永ころまで玖波村に御米蔵があり、ここから直接大坂へ積登せていた。やがて城下の六丁目(村)に米蔵が建てられ、一度ここに集められるようになった。¹⁸⁾大坂堂島には「小方屋敷」と称する蔵屋敷があり、ここへ積登せていたのである。但し上田氏への上納はいわゆる正租部分のほかは、餅米・爐米などに限られていたようで、歩米・厘米・小物成銀・水役銀は、公儀すなわち藩へ上納されていた。¹⁹⁾

簡単にしか触れることができなかったが、如上のことを前提に、次節以下村方役所を中心とする、家老すなわち給人による知行所支配の検討に移ろう。

〔註〕

- 1) 「太祖公済美録」, 「清光公済美録」, 『三原志稿』, 林保登編『芸藩輯要』, 浅野長武編『浅野家関係文書』, 『大竹市史』(史料編)などによる。
- 2) これらの分布を地図上に示したものとして, 西村嘉助・隼田「広島藩家老知行地の分布について」(『芸備地方史研究』41・42号), 前掲拙稿「基礎的考察」, 『新修広島市史』第2巻政治史編がある。
- 3) 「玄徳公済美録」巻12。但し同書所載「明和八年日記」によると, 与力は過失・乱心などで改易・断絶あいつぎ, このころには5人に減少したと伝えられる。
- 4) 「御履歴并御家政概略扣」(上田宗雄氏蔵)の“兵事”に「一, 小方陣屋 城山麓ニ在リ, 該地ハ国ノ西門ニシテ衝要ナルヲ以テ家臣左ノ面ヲ遣シ警衛セシム」とあり, 幕末(長州戦争ころ)に15人の家臣が詰めていた。なおこの史料は末永栄氏に写真を見せていただいた。
- 5) 「文化三年郷邑記」(『大竹市史』史料編第1巻所収)。また拙稿「基礎的考察」をみよ。なお三原浅野氏の城付五ヶ村については, さしあたり『三原市史』第4巻資料編1をみよ。
- 6) このような政策は御調郡において尾道町およびその周辺, 因島・向島, また豊田郡生口島・大崎島などの島嶼部が蔵入地とされたことにも認められる。
- 7) 小倉豊文氏「湯の山旧湯治場」(『広島県文化財調査報告 第2集』所収)。
- 8) 三原浅野氏の場合, 同氏の家臣が新開地詰を行ない, 年貢を搾取している。たとえば『三原市史』(前掲)所収「国郡志」「差出帳」をみよ。
- 9) 寛永7年の「浅野長晟申渡覧」(『自得公済美録』巻21下)に「新開田畠其村之検地高之外ニ候者年貢此方へ可召上事」とある。^(藩)
- 10) 家老知行地の免状は本田畑・新開を併記して記載。なお小給知の免状は知行地高のみ。
- 11) たとえば享保10年, 東方知行所の新開の唐樋仕替に玖波村の材木を用い, 大野・小方・玖波村の大工が従事している(『旧記書拔』)。なお『大竹市史』史料編巻2, 新開の項をみよ。
- 12) 「上田家へ永代畑売渡し証文」(『大竹市史』史料編巻1所収-p.148-)
- 13) 正保3年「安南郡河角村地詰之帳」(安芸郡熊野町 須山義夫氏蔵)を整理すると右表のようになる(「け作分」のみ)。このうち3名のものが「御手作地」とされている。
- 14) 「文政二年国郡志御用ニ付郡辻書出帳」(『大竹市史』史料編巻2所収)。^(藩)
^(上田氏)諸村の差出帳類でも, 「御公儀御建山」と「御屋敷御建山」(また「此御方様御建山」)は厳密に区別されている(同上)。
- 15) 三原浅野氏については『三原市史』巻4資料編1所収「国郡志」「差出帳」をみよ。川角村には浅野孫左衛門の御建山・御建藪が各1ヶ所あった(文化12年「国郡志御編集ニ付諸色書出帳」-須山文書)
- 16) 以下紙については『大竹市史』史料編巻1・2, および「御紙方御用控」・「頭庄屋諸控」をはじめとする和田文書。詳しくは別稿を期す。
- 17) 家老知行地の年貢搾取形態については, 小給知・蔵入地との比較という観点から, いずれ別稿を用意したいと考えている。
- 18) 念のため論拠を一例のみ示す(「小栗林村万書附控」-和田文書)。
 覚 佐伯郡小栗林村
 上田主水様御物成之内
 一、米
 右之通此度積登し申候間川口無相違御通せ可被下候, 為其書付差
 上申候, 已上
 已 年

川角村の構成 (正保3年)

名 請 人	持高(石)	備 考
源左衛門	14.4687	
孫右衛門	13.218	
喜 三 郎	9.7977	
平 次 郎	9.5337	
新 五 郎	8.624	
源 蔵	7.8918	
四郎三郎	6.7744	
助左衛門	6.170	御手作地
九 兵 衛	5.9863	
孫 九 郎	3.280	御手作地
勘 六	2.393	
助 次 郎	2.055	
源 兵 衛	1.975	
源 次 郎	0.7909	御手作地
孫 七	0.2773	
彦 次 郎	0.320	
ご け	0.150	

広島川口
御奉行様

庄屋 利 兵 衛
与頭 庄右衛門 』

「浅野孫左衛門様御物成之内」，以下同文のものが東城浅野氏にもある（安芸郡熊野町 織田信氏蔵「諸書附上り控帳」）。

- 19) この点は両浅野氏とも同じである。さしあたり前掲『三原市史』，「覚書」（『三原郷土資料第1集』）・「御巡見衆へ申上覚書」（同第3集）・「差出シ帳」（同第4集）をみよ。また織田・須山文書にも。詳しくは註17) のとおり。

3. 知行所の支配機構

A. 陪臣団の構成

知行所支配は家老の家臣がその衝に当たるのであるから，まずこの構成について述べておかななくてはなるまい。家老に限らず，家中はそれぞれ知行高に応じて家臣を抱えていたことは周知のことであろう。それは本来，軍事上の要請，つまり軍役奉公のために義務づけられていたのであるが，平時には知行地支配や家政に携わったのである。広島藩の軍役規定を示すと表3のごとくである。さしあたり最終的規定とみられる，延

宝2年のものをあげておいたが，とにかく戦陣に参加すべきものとして，5,000石の知行取で最低63人の供連れが必要なのである。したがって日常的には，下男・仲間などこれに加うるに，数倍のものを召抱えておかななくてはならなかった。

いま三家老の家臣構成を示すと表4～6のようになる。それぞれ基準が異なるので，各表にかなり差が認められるが，いずれも数百人の家臣を召抱えていたのであり，ほぼ知行高に比例しているとみてよい。表3と比べてみても，現実に召抱えている家臣数は，軍役規定の数倍にのぼっていたことは明らかである。このうち表²⁾4の「知行取・給人」というのは，家中の場合知行高 100石以上をこのように称していたので，この呼称にならったものとみられるが，家老からさらに知行地を賜わっていたものではなく，米を現物支給されていたもののようである。三原浅野氏でみると（表5），100石以上を知行取と称したようであるが，上田氏の場合では必ずし

表3 広島藩の軍役（延宝2年）

知行高	鉄砲	鎗	弓	旗	馬乗
石 石 200～ 250	1				
300～ 350	2				
400～ 450	2	1			
500～ 550	3	1			
600～ 650	3	2		。	
700～ 750	5	2			
800～ 850	5	2	1		
900～1000	5	2	2		
1000	5	3	2	2	
1200～1300	5	3	3	1	
1400	10	3	3	1	
1500～1700	10	3	3	2	1
1800～1900	15	3	3	2	1
2000～2200	15	5	3	2	2
2300～2400	15	5	5	2	2
2500～2700	15	5	5	2	3
2800～2900	20	10	5	2	3
3000～3400	20	10	5	3	4
3800～3900	25	10	5	3	5
4000	25	10	5	4	6
4000～4500	25	10	10	4	6
4500～4900	30	10	10	4	7
5000	30	10	10	5	8

「顕妙公済美録」巻2により作成

表4 三家老の家臣数

区 別	家 老	上田氏	三原浅野氏	東城浅野氏
知行取・給人	人	36	77	25(与力共)
中 小 姓		39	57	38
合 力 扶 持		1		
歩 行 (徒士)		60	52	45
足 輕		75	140余	47
大 番 組		50	94	
徒士以下坊主		8		
船 手		21	50余	9
小 人		145	260余	133
計		435	730余	297

浅野長愛氏藏『御家中目印之図 宮内少輔様共 三家老衆侍帖目印共 八』(学習院大学所管)の内「上田主水侍帖目印」「浅野甲斐侍帖目印」「浅野越前侍帖目印」により作成。

もそのようにはいえない。表6は幕末期のものであるが、上田氏の総家臣数とその給禄を示す。前表との差異がかなり著しいが、職人・新組・刀差組などが、前表では除外されているのである。^(長州戦争) 実際に「征西ノ役出張人数」は家臣 577 人・夫方 470 人と書上げられており、この表にほぼ一致するのでこの程度の家臣を召抱えていたことは明らかである。また夫方は「小方ニ於テ采邑ノ壮丁者ヲ徴収シ」、家臣を「安芸郡戸坂村(上田氏の知行所一筆者)ニ遣シ采邑ノ壮丁者ヲ募集シ」たものなど、知行所百姓で構成されており、幕末においても知行所から徴発していた。これらの家臣は諸表の差異からも窺われるように、一定のものでなく、「職務ニ精励^(ママ)スル者ハ其考績ニ依リ昇格及ヒ秩禄加増ス、若

表5 三原浅野氏の家臣構成

構 成	年	元和 5 年	明治 2 年
石	人	人	
1000	3	1	
600	1		
500	4		
400	1		
300	6	2	
200	37	12	
100	31	45	
小 計	83	60	
扶持取など	?	153	
その他(※1)	?	994	
計	83+α	1207(※2)	

『増補三原志稿』所収分限帳(p.351~358)にて作成。

※1 歩行・小姓・足輕・小人など。

※2 史料上の計は 1,229 人としている。

表6 上田氏の家臣と給禄

種 別	人 数	給 禄 計	平 均
士 分	121	石 4,839.000	石 39.992
組 外	8	80.300	10.038
歩 行 組	60	495.000	8.250
算 用 組	21	145.600	6.933
鉄 砲 組	78	513.900	6.588
水 手 組	12	99.000	8.250
職 人	15	84.000	5.600
新 組	20	85.000	4.250
刀 差 組	97	180.690	1.863
浮 組	10	18.000	1.800
小 筒 組	46	135.900	2.954
駕 籠 者	13	81.600	6.277
馬 捕	8	50.600	6.325
砲器細工人	1	3.100	3.100
小 人	75	288.500	3.847
計	599※	7,105.790	11.863

上田宗雄氏藏「御履歴并御家政概略扣」のうち「庶政」一家臣種別一により作成。

※ 計算では 585 人となるが史料による。

シ不動ノ者アルトキハ懲戒シ以テ罷陟ノ典ヲ行フ」のが普通であった。

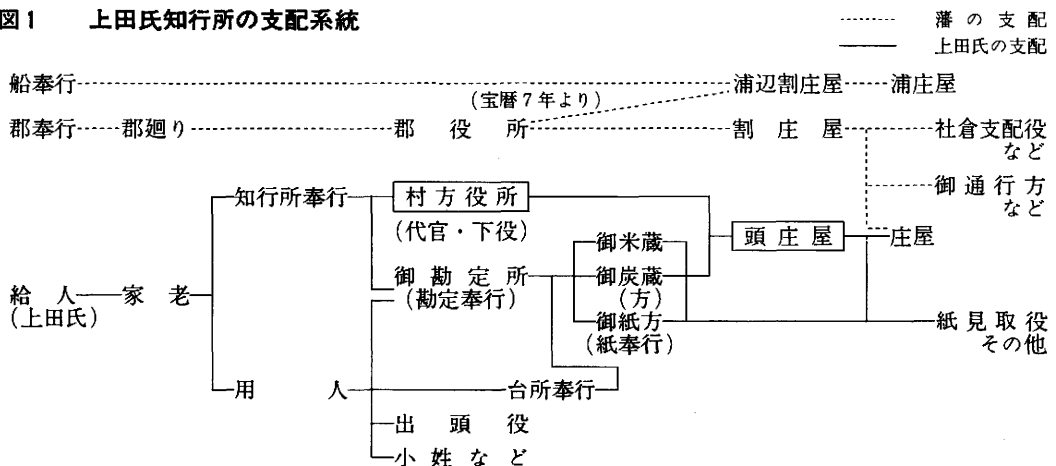
なおこの表で注意すべき点は、家臣給禄の総計が 7,000石を越えていることである。先述のように上田氏の知行高は 1 万7,000石であったから、正租収入はかりに免 5 つとみても約8,500石にしかない。中期以降「減石」・「上ヶ知」——ときには半知に及ぶ——はごく普通のことであったから、正租部分のみではその財政を賄い切れるものではなかったといえることができる。ここに知行所における新開の問題、また製紙業支配などが意味をもってくるのである。⁴⁾

B. 給人（＝家老）の知行所支配

給人たる家老の知行所支配系統は、知行所奉行－村方役所－頭庄屋－庄屋であり、村方役所が⁵⁾庶政の中心であった。それはあたかも、蔵入地・明知方——また小給知も多くの側面において——が、周知の郡奉行－郡役所－割庄屋－庄屋という系統で支配され、郡役所が郡（村）支配の中核であった如くである。但し、次項で詳述されるように、家老知行地といえども、郡役所の支配下にもおかれていることは事実であるから、この両者による支配内容の差異をまず明確にしなければならない。村方（＝知行所）においても、村方役所と郡役所の支配は厳密に区別して扱えられていたし、⁶⁾先述の課題に迫るためには、この両役所の職務内容の差異を明確にすることが、何よりも有効であろうと思われるのである。そのために上田氏を中心として、給人たる家老が、その知行所をどの範囲内において支配したかを、とくに村方役所の機構・職掌・機能などの検討を通じて提示することが、本項におけるわれわれの課題である。但し番頭・者頭など以下の、いわゆる番方については触れないことにし、直接知行所支配にかかわることのみが述べられること、および行論の関係から、郡役所支配についても若干触れざるをえないことを断っておく。

まず郡役所系統とともに、家老による知行所支配の系統を示せば、ほぼ次図のようになろうかと思われる。⁷⁾大きく知行所関係と対藩府乃至家政関係に分けられるが、後者はもっぱら上田家の家政・家老相互間また藩府との諸交渉にあたるので、ここでは触れない。この二系統の役人は決

図1 上田氏知行所の支配系統



して固定的なものではなく、相互に交流また兼帯していることは後述のなかで明らかとなろう。

次にそれぞれについて述べるが、紙数の都合で勘定所系統は触れない。⁸⁾家老は史料上「御家司」とも記されているが、要するに家政・知行所支配の最高責任者である。知行所奉行や用人の任免は家老の名前で行なわれていた。正徳5年吉田瀬兵衛が200石加増(＝足し米)のうえ家老となっている。万延元年前後、給禄400石の河瀬喜和馬、同300石の山村静登が用人であるので、家老はこれ以上の給禄であったろうか。家老は1人であったが、先述したように、知行所は東西に分割する形をとっていたので、これに応じて以下の諸役人も二つに分けられている。

知行所奉行(同見習)は知行所支配の最高責任者であり、「^(頭庄屋宛)態申遣ス、福山求馬殿御知行所奉行被蒙仰候、尤吉田藤馬殿御知行所之義其俣被仰合候様ニとの御義ニ付、此旨被相心得…後略…」(嘉永4「頭庄屋諸事控」一和田文書)、また「御奉行様兩人、御代官様四人」(「松原丹宮代扣書」一中丸文書)などあるところから、東西に各1人、計2人が定員である。史料上では「御屋敷惣御奉行」また単に「惣御奉行」とも称され、管見の限りでは元禄13年の横関十太夫が初出である。職掌は「林三郎右衛門支配 村方御役所」のようにいわれ、第一に村方役所の統轄である。二例示す。

A)

御知行所奉行

村々庄屋役人共村方御役所詰下役ニ至迄、都而宅談ハ一切不相成、諸願筋有之候とも御役所ニ而請引可有之候、此後流合宅談等致候趣相聞候ハ、准其旨急度御叶御振りも有之候事

但村方も申出筋差掛り猶予難相成事柄者宅江申出サセ、其許早速申出可有之候
右之趣村々江得斗相示し可被置候事 [村方役所宛]

(中丸文書)

B)

御知行所奉行

旧獵從御上尚又五歩通当年^(薄)御減石之趣被仰出、此御方^(上田氏)ニも下地御手詰至極之御世帯向弥増御難決之御事ニ候得者、御知行所村々之内^(薄)不^(上田氏)時之御仕向筋歟出候共、一円へ御手茂不被為届候間其段兼而相示し可被置候事

申二月

態申遣ス、別紙之通此度被仰出候条……(中略)……此旨相心得組合村々へ厚示し合可申者也

申三月 村方御役所

頭庄屋小方村 吉左衛門

(嘉永元「頭庄屋諸控」一和田文書、『市史』p.111)

A)は村方役所諸役人と村役人との宅談を禁じたものであり、B)は減石(＝上ヶ米)のために、給人による知行所への「御仕向」が不可能なことを、村々へ徹底させることを令したものである。免状の下付も知行所奉行名で行なわれている(蔵入地・明知方は郡代官)。現存する免状の署名は、確認しえた限り知行所奉行であり、年貢に最も重点をおいたことが窺われる。元禄13年には、横関十太夫が大庄屋を任命したとしているが、やがて村役人の任免は村方役所の職掌とされる。兼

帯も少なくなかったとみられ、用人兼帯には天明7年の長岡新七・安政3年の福山覚右衛門・元治元年の深谷三郎などの例があり、勘定奉行兼帯には文化9年の三好角左衛門・安政5年の丹羽正治などがある。なお知行所奉行と村方とは、免状の下付を除いて直接文書のやりとりはせず、村方役所を通して行なっていたもののようである。

以上の叙述からも窺われるように、家老・知行所奉行についてはわからない面が多い。それは直接知行所支配に当たるのが村方役所だからであり、地方史料に家老・知行所奉行が現われることが少ないという制約によっている。

次に村方役所について述べる。村方役所も東方役所と西方役所にわかれていた。但し村方役所そのものが2ヶ所にわかれて所在したのではなく、諸役人の担当が東西に分けられ、その職務を分担していたと考えるのがよさそうである。まず村方役所の所在場所は、「村方御役所御本屋しきの内ニ有之、同文政六御向屋敷へ建ツ、同年六丁目へ御吟味屋敷建」(「豊助目録」一中丸文書)とあり、城下の上田氏屋敷内であつた。ここに頭庄屋・庄屋を呼出したり、随時役人が知行所に出張して支配していた。

役人は代官2人・下代2～4人を基準とするが、下代にはときに若干の出入はあったようである。代官の辞令の一例を示すと次の如くである。

中 川 彦右衛門

村 川 甚 五 郎

其方儀以後佐伯郡二拾ヶ村引受相勤可被申候、御境懸之儀只今迄之通念入可申旨被仰付候、当御時合万端御為筋之儀厚申合可申候、東郡十八ヶ村者此後中川惣兵衛簡井郡平へ引受被仰付候、其内村方双方共何そ違変之儀も有之候節者一統ニ厚ク申値可仕候事 (天明六「御用向日記」)

知行所が周防国との国境にあっただけに、「御境懸之儀」がことに強調されていることが注目される。中川惣兵衛・簡井郡平にも「御境懸之儀云々」を除けば、全く同文の辞令が下されているが、惣兵衛は「御中小姓組」から、郡平は「組合」からそれぞれ2石加増のうえ任用されたものである。このように各2人が東西知行所を受けもつのであるが、「何そ違変之儀」でもあれば、相互に協力して支配した。下代は多くの場合、「村方御役所詰」として任命されているが、まれには「村方御役所詰、御境請、御炭方兼帯」のように、職務の指定乃至兼帯も令せられている。

次に村方役所の職掌に移る。知行所奉行が免状を下付することは先に述べたが、これに基づいて行なわれる年貢搾取にかかわることは、すべて村方役所の職務である。代官の下役に「免割方」「村方御役所詰算用組」などがあり、また年貢に関する知行所百姓の諸願いなども、すべて村方役所へ差出されている。詳しくは第二節註17)のとおりの。

村方役所はいわゆる裁判権・警察権を掌握していることが注目される。差縛りは内済が原則であるが、それでも目安訴訟に及び、村方役所の吟味に委ねられることも少なくなかった。前掲史料にみられる如く、六丁目(村)に吟味屋敷がおかれており、吟味そのものはここで行なわれたものと思われるが、判決はすべて村方役所名で申し渡すのである。現実には申し渡された量刑も、急

度叱り・追込・籠舎・村追放・御知行所村々住居構など、さまざまなものをみることができる。しかしここでは、実際の訴訟・吟味内容にまで立入ることは、紙幅の関係よりして不可能であるから、後述する村方役所の職掌にかかわることで、訴訟に持込まれたものはすべて、この役所の吟味の対象となるということを指摘するにとどめざるをえない。なお若干付言すれば、公事出入の際の諸入用負担規定——たとえば村役人の広島出飯米、村方役所の役人が取調べに出張するときの運賃・宿賃などの諸費用、取調べ中の筆・墨・紙・油・蠟燭代および諸道具代などの量やその出し方——、領分(=知行所)追放の仕方——たとえば本人・妻子とも追放の場合、本人のみ追放の場合などの家財田畑山林の処分方法——をはじめ、入牢中の科人の諸賄い——たとえば扶持米・湯湧代・薪塩代・薬代・着替えなど——や、牢屋の掃除・燈油代などにいたるまで、「御屋敷様御定」^(上田氏)として詳細に規定されている。また玖波村には、家臣をはじめ西方知行所・安芸・高宮・豊田郡の科人(=知行所百姓)を入牢させるための牢屋がおかれ¹¹⁾、吟味屋敷には「責道具」も備えられていた。知行所には、村方役所支配下の横目や目付が徘徊していたし、知行所百姓の生活のさまざまな側面に及ぶ給人法をも考えるならば、一個の司法体系すら窺わせるものがある。

表7 大竹村役人と任命権者 (文政～天保期)

任命権者 村役人名	郡 役 所	村 方 役 所	左の「御双方」	御 紙 方
源 左 衛 門	向領へ対し 苗字帯刀御免 割庄屋格 小島新開引受	頭庄屋同格 庄屋後見	御境見廻役	頭取役 苗字御免
甚 太 郎	割 庄 屋	頭庄屋同格		
清 四 郎	庄屋格 小島新開引受	庄 屋 格		
平 左 衛 門	社倉十人組頭取			
官 左 衛 門	庄 屋 格			
七 三 郎	地鳥見 庄屋格			
三 十 郎		与 頭 格		
清 九 郎	小島新開見廻役 与頭格			
源 七		与 頭		
嘉 十 郎		与頭格 年行司		
貞 藏		与頭格 年行司	寸志銀取立役	頭取役 苗字御免
広 右 衛 門	諸紙丸別取立方村々辻引 受御用懸り	与頭 取立銀御用懸		
斧 太 郎		庄 屋		
林 兵 衛		与 頭 格	御境見廻役	頭取役 苗字御免
甚 兵 衛	割庄屋格 西御境御用懸	頭 庄 屋 格		
五 兵 衛		与 頭		
甚 七		庄 屋 格		

「天保十二年 頭庄屋諸控」(『大竹市史』史料編巻1, p.210～211)より作成。

なお小島新開は蔵入地である。

村役人の任免は一部を除いて村方役所の権限であった。大竹村の例を表示してみたが（表7）、御紙方も上田氏の役所であるのでこれも含めて考えると、庄屋・与頭・年行司をはじめ、多くの村役人が村方役所から任命されていたことは明らかである。このほか頭庄屋はもちろんのこと、¹²⁾山守・新開見廻役・塩浜見廻役などの任免権を村方役所が握り、紙方・炭蔵・米蔵系の諸役人を加えると、給人たる上田氏の村役人任免権はかなり広い範囲となる。なお表の頭庄屋格・庄屋格・与頭格は、幕末にいたって他郡村（蔵入地を含む）ともに多く任命されているが、村役人としての格式を与えることによって、揺らぐ知行所支配（藩制）の維持をはかろうとしたことの表現とみられるものがある。また「御双方」とは、郡役所・村方役所を指すが、周防との国境であるだけに御境見廻役が双方から任命されたのである。念のためにいえば、いわゆる“総給知代官支配”の期間は、「従公儀」すなわち藩が村役人の任免を行っていた。

上の3点が村方役所の主要な権限・職務であるが、このほか諸史料（註8）にみられる職掌を簡単に示しておこう。俵約令その他さまざまな給人法の発布、奉行・代官などの交代の布達、新開の築調・鋤初め・樋仕替・損所繕いや山林伐採の免許、種米銀・夫食米銀貸付や囲米・貯米の命令、鰥寡孤独・窮民への救米、鉄砲取調べなどの土地・救恤・治安関係から、百姓の改名免許、勘当解除、寺院住持の交代免許、虫送りや雨乞祈禱・諸興行の免許、百姓褒賞——年貢早勘定・難渋者施行・「誉」（節婦孝子・義僕婢）・「苗字帯刀袴着御免」など——などの日常生活に至るまで村方役所の権限が及んでいる。またことによっては、百姓の意を受けて郡役所へ掛合うこともあったし、逆に藩政改革などの場合は知行所に対しその周知方を計るなどしている。なお知行所には、玖波村御炭役所——寛政11年建つ——、小方御蔵屋敷——寛政12年御長屋建つ、知行取・御中小姓居住——¹³⁾をはじめ、栗栖村御炭方などの役所がおかれ、御炭方引受などの役人がいたが、これ以上触れない。

以上上田氏の西方知行所を対象として、村方役所を中心とする支配機構・支配内容をみてきたが、東城浅野氏の知行所支配にもほとんど同じことがいえる。支配機構は家老を筆頭に用人2人（小姓頭兼帯および東城町奉行兼帯）・歩行頭・足軽頭・勘定奉行（村方支配兼帯）・側用達・目付役・勘定役・膳番役・蔵奉行・代官役・船奉行・割奉行・¹⁴⁾武具奉行・書翰役・乗方役・作事方など、家政・番方とともに多くの職名をみることができる。川角村の史料でみても、直接庶政に当たるのは村方役所であり、代官・代官添役・吟味役・村方下役・当用方・元方などの諸役人がある。村方役所の職掌も先述上田氏知行所とほとんど同じである。“ほとんど”と限定したのは、川角村の場合たとえば、紙楮が安芸郡役所の支配であること、また後述のように川角村組合に頭庄屋がおかれず、かつ知行所以外の村との諸関係も川角村の方が密接であることなど、上田氏の支配と若干異なる側面が認められるからである。

家老知行地が村方役所によって基本的に支配されていたことは、如上のことで明らかになったと考えるが、知行所と村方役所の間位置づけられるのが、ほかならぬ頭庄屋である。

頭庄屋は結論的にいえば、知行所におけるいわゆる大庄屋・割庄屋とみられるものであるが、

その起源などについては必ずしも明らかでない。広島藩では確かに寛永期には大庄屋という名称を認めうるし、その組合村々も決められていたことを確認することはできるが、それが蔵入地・小給知で割庄屋、家老知行地で頭庄屋と改称される経緯を詳かにしないのである。またこの藩で頭庄屋といえは、まず思い出されるのが、いわゆる「正徳新格」における所務役人・頭庄屋である。しかし同じく頭庄屋といっても、正徳新格における頭庄屋とここで考察しようとするものは全く性格を異にしている。¹⁶⁾

そこでまずこれらについて、若干の考証を行なっておこう。¹⁷⁾

- A) 同十二年卯御先格之通御檠相止、御知行所御屋敷様支配戻ル、依之居村庄屋并ニ頭庄屋被為仰付、同十三年十二月四日大庄屋役御奉行横関十太夫様ヨリ被仰付候、^(ママ)頭庄屋御給米三石宛…(中略)…正徳五年末^(ママ)大庄屋出精相勤候由ニテ…(以下略)…(「永代記」)
- B) 一 元禄十三年辰年横関十太夫様御支配之時大庄屋被為仰付候 (「旧記書抜」「市史」p. 204)
- C) 諸郡ニ所務代官ト唱一郡ニ四五人ツ、有之、郷士杯ノ様ニ心得居候由、相止ミ候而割庄屋ト申者始ル、私ニ曰御当所は往古^(ママ)頭庄屋ト唱今ニあり…(以下略)…(「郡邑記」)
- D) 一 (前略)頭庄屋之儀往古御明知所務役人頭庄屋之頃、御給知大庄屋唱ヘニ而何れも御役料上^(ママ)被下候義と相聞候処、享保度御仕置御切替所務役人頭庄屋御廃止以来、割庄屋名目御改メニ相成、御切米無之事ニ相聞ヘ申候、其節御給知大庄屋是又御改メ頭庄屋与相成候…(以下略)…(明治3年「故給知頭庄屋役料出方之義歎出候ニ付御窺書付覚」一和田文書)

A) はいわゆる知行地戻しを期して頭庄屋としたとしており、いかにもありそうなことではあるが、元禄13年・正徳5年の記述と矛盾する。B) はA) とよく似ているが史料が同性格であることによっている。C) は正徳新格の廃止後割庄屋が始まったが、「御当地」つまり知行所ではそれ以前から頭庄屋と称していたというもの。D) は正徳新格のころ知行所は大庄屋であったが、新格廃止後頭庄屋が割庄屋に、知行所の大庄屋が頭庄屋とされたというものである。大きくふたつの見解に分かれ、江戸時代すでに判然としなくなっていたことを示している。わたくしも明確に判断しえないのであるが、¹⁸⁾「大頭」とあること、また管見の限り、知行所における享保以前の原物文書に、頭庄屋という呼称がみられないことなどからD) に近い。正徳新格廃止を機会に、知行所のみそれまでの大庄屋を頭庄屋と呼称するようになったと考えておく。

大庄屋・割庄屋の職掌は周知のことであるから、頭庄屋の職掌についても多くを触れることはあるまいと思われるので、知行所は異なるが二例のみ示す。

A) 申 達

- 一 佐伯郡世羅郡村々願筋其外諸書付類、品ニ寄頭庄屋をはなれ申出候類も有之一定いたさす候、以来ハすへて頭庄屋ヘ申出、頭役手元ニ而得斗相約其上ニ而申可遣候
但書付あて所ハ村方御役所と仕候事
- 一 頭庄屋無之村々是迄書付類出し方まちまちニ有之候、以来ハ村方御役所とあて岩崎弁右衛門上
方迄可差出候

右何れも品ニ寄此方ともへ当テ、又ハ頭庄屋へ当テ認候而可然筋も可有之候、其時ニ至差図可申付候
(天明6)
午三月

石 井 勘 次

山 田 弥兵衛

村 上 勇 藏

(天明6年「御屋敷様御俵
約御状写」一織田文書)

B) 覚

一 村々諸願書附都而頭庄屋差出取次差上不申儀ハ御引受無之様被成度…(以下略)…(嘉永7年
「諸事扣」一中丸文書)

A)は東城浅野氏のもの(いわゆる給人法のひとつ)で、両郡の知行所からの諸願類は頭庄屋伝いに申し出ることとし、川角村のように頭庄屋がおかれていない場合は、直接村方役所宛に差出すよう令したものである。B)はA)と同趣旨のものであるが、知行所の3人の頭庄屋の村方役所宛願書の一部である。要するに原則的に頭庄屋を経由すべきものとされたのであり、かなり乱れていたとみられる。頭庄屋が庄屋などの村役人を兼ねることは割庄屋と変わらず、頭庄屋給は2~4石上田氏から賜わり、頭庄屋としての袴着用の免許なども村方役所の権限に属していた。

最後に頭庄屋の組合村と庄屋について若干検討して本項を終ろう。後論のために割庄屋の組下も示しておいたが、表8の如くである。頭庄屋と割庄屋で若干年代がずれるが大差なきものとみてよい。知行所が三分されて頭庄屋がおかれたが、同時に二分されてそれぞれ蔵入地と小給知を加えて割庄屋組とされているが、次の諸事実が指摘される。まず割庄屋組下は他郡の例でみても、上組・下組・浦組などと分けられはば(絶対ではない)一定であるに対して、頭庄屋組下には年により若干出入りがあること。第二に

頭庄屋が3人(一時的掛持を除く)、割庄屋が2人(佐伯郡で6~7人)であること、および小方村孫右衛門・吉左衛門(父子)の和田家が代々頭庄屋・割庄屋を兼帯したことなどは中期以降変わらなかったこと。第三に組合村は頭庄屋組下がかなり離れた村々を1組としていることもあるが、割庄屋組下はほぼ集中性をもっていることであり、したがって割庄屋の方が機動性が高いといえることなどである。

表8は西方知行所のものであるが、東方知行所はどうか。少なくとも安芸・高宮・高田・三谿・三上郡と豊田・奴可・世羅郡の2組に分けられ、各々に

表8 頭庄屋と割庄屋の組合村

頭 庄 屋 (天保13年)	各々の組合村	割 庄 屋 (文政10年)
	地御前(蔵入地)	
小方村	小方、油見、大竹	小方村
吉 左 衛 門	木野、谷和	孫 右 衛 門
	大栗林、小栗林、浅原	白砂村
大野口谷尻村	松ヶ原	秀 藏
三 郎 左 衛 門	大野、口谷尻、峠 玖波、黒川	同 上
宮内村	宮 内	孫 右 衛 門
理 右 衛 門	栗栖、中道、渡瀬 後原、奥谷尻	同 上
	白 砂(小給知)	秀 藏

『大竹市史』本編第1巻、p.158、162から加工作成

頭庄屋がいた模様である。しかし必ずしも不変のものではなかったらしく、寛政6年、戸坂村の頭庄屋周助は村方役所より高田郡(3村)と三谿郡(1村)の「組合支配申付」(同年「御用向日記」)けられている。文意からしてこのとき頭庄屋組下の組替があったと考えられるが、とにかく数郡にまたがる頭庄屋がいたことだけは確かである。かかる場合、先の諸事頭庄屋経由という原則は、かなりの困難を伴っていたであろうことは十分推測しうる。

なお庄屋について一言すれば、いわゆる掛持庄屋は必ず知行所から任命されたことを指摘しておかなくてはならぬ。西方知行所においては管見の限り、知行所相互の掛持庄屋は多いが、知行所の庄屋を蔵入地や小給知から補った例はなく、その逆もまた皆無である。東城浅野氏の例でも、川角村庄屋四郎右衛門が、「府中村(入会い知行地——筆者)之内御知行所当分掛持庄屋役」を「御屋敷御代官」(須山文書)から任命されている——両村の距離は3~4里(「国郡志」—須山文書)——。これらは村方役所が庄屋任免権をもっていたという指摘からも十分うなずけることであろうと思われる。

C. 郡役所(=藩)の知行所支配

念のために断っておきたいが、本項で“知行所支配”というのは、藩が一般的に知行所をどのように支配したかということではなく、西方知行所の如何なる諸側面に支配が及んだかという意味である。したがって全藩に及ぶことは、藩が各郡役所を通して支配する(図1参照)わけだからここでは除外し、個別具体的なことのみにわたって述べられる。結論的にいえば前項で述べたこと以外のことが、郡役所の支配ということになる。郡役所の一般的な職掌は多くの『市町村史』が触れるところでもあり、紙数もないので、ここでは簡単に述べるにとどめよう。

まず宿駅・天下送りなどの交通関係が郡役所の支配であつた²⁰⁾。知行所では玖波村に宿駅がおかれていたが、すべて郡役所←→割庄屋をとうして行なわれた。たとえば幕府・諸藩の諸役人の通行や駅所仕構いなどに関する触れ、人馬の徴発、割庄屋・庄屋への御通行方・人馬見届役等の任命、駅所難渋についての諸願いや申渡し、また天下送りの任命やその給米10石の給付などである。小方村孫右衛門・吉左衛門は天下送りや御通行方に任じられているが、あくまで割庄屋としての孫右衛門・吉左衛門が任命されているのであり、頭庄屋としてのかれらが任じられるのでは決してなかった。幕府・諸大名の通行への人馬徴発には知行所・蔵入地の区別はなく、この点は川角村も同じで、安芸郡役所の命によって海田市まで出役(人足10人・賃籠1丁が原則)している。ことが幕府・諸藩にかかわることであっただけに、郡役所支配におかれたのである。農民もこれを利用して要求の貫徹をはかるところがあり、往還筋の取締いを「何様丈夫ニ普請不仕候而ハ九州御大名様御通行之節甚タ無心元」(和田文書)と、九州諸大名の通行を口実に早期免許を願い出ている。また藩役人の領内廻村には、渡瀬村(知行所)のように、「御給主様之御役人様方御廻村之節ハ継送り申候得共、御明知方御廻村之節人馬継方不仕候義」は、「古形古例」(安政3年「郡用諸事控」)といい、藩役人廻村のための人馬徴発を拒否する村もあった。知行制を逆に

とった農民の抵抗とみられるものがある。

社倉も郡役所支配下におかれた。社倉の管理は村役人などから任命される、社倉支配役・社倉十人組頭取などが当たったが、これら社倉役人は郡役所が任免した（表7をみよ）。社倉貯米銀などは郡役所の命ずるところであり、また社倉麦などの算用帳は村役人から郡役所へ提出され、社倉にかかわる諸願いは割庄屋を通して郡役所へ差出された。これらは社倉のもつ意味からしても容易に首肯しうることであろう。なお囲米や一般的救恤は村方役所——頭庄屋ラインであったことはすでに述べた。

このほか、上ヶ米・押米・新家建・手作り手絞り油粕・酒造株・煎海鼠などの俵物・鷹方御用（表7の地鳥見）などが郡役所の支配に属し、幕末になると異国船問題や攘夷問題なども含まれるにいたる。上ヶ米・油・酒・俵物・幕末のことなどでほぼ見当がつくと思われるのでこれ以上詳述しない。

なお郡役所ではないが、藩の支配として船奉行による浦方支配があった。²¹⁾ 西方知行所では、大竹・小方・黒川・玖波・大野村が同時に藩の浦方として設定された。すなわちこの5ヶ村は村としては知行所であるが、浦としては藩の浦方となるのである。船奉行による役家調査も行なわれ、加子役の徴発その他に船奉行の支配下とされ、蒲刈繫船米なども浦方として負担している。

次に割庄屋について簡単に述べる。割庄屋の任免は郡役所であることはすでに述べた。安政2年佐伯郡廻村の途次大竹村に泊まった同郡代官佐藤源右衛門は、割庄屋吉左衛門に「頭書」（同年「郡用諸事扣」——和田文書）を下げ渡している。「第一治方御所務筋始メ、郡村入役減少方益力入可遂切磋、此場合割庄屋之役前」といい、「郡村諸用向正道潔白……（中略）……万事濁ナク群体之鏡と心得、村々役人共之清濁平常無油断相糺」すようにというのがその趣旨であった。ごくありふれたものであるが注意すべきは、割庄屋が糺すべき村役人とはこの場合、知行所以外の庄屋と、上田氏によって任命された知行所の庄屋以下を指すことである。つまり郡役所は上田氏が任命した村役人をとうして村を支配したということである。

安芸郡川角村は、割庄屋組下としては熊野村などとともに上組に属し、船奉行支配の浦方のことを除いて以上とほぼ同じであるが、諸史料からみると、上田氏知行所より若干強く郡役所の支配が及んでいるかにみえる。これは安芸郡に1村（表1参照、他の1村は府中村で入会い知行地）という地理的条件、或いはこの村が熊野村など7ヶ村とともに「熊野七郷」といわれ、初寄合以下の諸行事を七郷村々で共同して行ない、また「乱妨防之義ハ七郷村々一致ニ防方之次第書付之趣同意仕候」（慶応3年「御触状写帳」——織田文書）のように、七郷村々が時として一単位の如き態をなしていることによるのであり、必ずしも上田氏と東城浅野氏の支配の差ということにはならない。

最後に史料の残存形態から誤解を招きそうなことについて一言しておく。簡単にいえば、知行所村に郡役所から割庄屋宛の諸法令・諸達類が残存——たとえば如上の「郡用諸事控」・「御触状控帳」の如く——していても、その史料がただちには郡役所の知行所支配を示すとはいえない

いということである。すなわちこれらの諸法令は、郡役所から郡内すべての割庄屋（安芸郡 3～4 人・佐伯郡 6～7 人）に連名で宛てられており——史料的には全員の名を書くほか「割庄屋共」「割庄屋不残」「割庄屋七人」とされる——、必然的に蔵入地・小給知に対する郡役所支配の史料を含んでいる。西方知行所に即していえば、同じく割庄屋孫右衛門（表 8）に宛てられたものでも、明確に知行所に関することと、全郡乃至蔵入地に関することを厳密に峻別する必要がある。たとえば年貢に関して、割庄屋宛の郡役所法令を多くみることができるが、先述のことからも知行所は適用範囲外としなければならぬ。川角村の史料では宛名に安芸郡の村々を書き上げたり、時付廻達の順番を書いていることが多いが、子細に検討すれば、戸坂村（上田氏）と川角村（東城浅野氏）の両村はそれらから除外されて²²⁾おり、それと同文の史料を隣村熊野村や割庄屋（たとえば中野村清左衛門）に残存する史料群のなかから見付けることはさして困難ではない。つまり割庄屋組下に入っているということのみで、史料として残存しているだけであり、その法令が適用されたか否かは別の問題だ²³⁾ということである。

本項ではかかる検討を経て、知行所に対する郡役所支配の内容が確定されているのであり、史料の残存状況から単純に引きだしたものでは決してないのである。

D. 小 括

「一度御知行所之百姓与相成候者ハ子々孫々迄無窮ニ家ヲ伝」（慶応 2 年「御触状写帳」——須山文書）え、給人のために力を尽くすべしというのが、給人法（東城浅野氏）の一節にある。知行地の割替が頻繁に行なわれた小給知では考えられないことであり、知行所が永代不変であったところからきたものとみられよう。知行所からは家老家の冠婚葬祭や年始歳暮の祝儀に庄屋以下が参上したり、上田主水の死去に際し「知行所斗り五十日之間」鳴物停止を行ない（「松原丹宮代扣書」）、また主水はじめ「若殿様」「御姫様」のために「御知行所四十ヶ村」が祈禱し、それに対して上田家から鳥居を寄進するなど（同上）、いわゆる給人と知行所の諸関係は、小給知に比べてはるかに密接である。

これらのことは、上述の村方役所を中心とする知行所支配や、知行所の存在形態からきたものに相違ないが、問題はこれをどう考えるかということである。すなわち、村方役所と郡役所の職掌は截然と分かれているといったわけだが、両者の諸関係——たとえば上下関係など——や、このことが百姓に対してもつ意味などが問われる必要があらうかと思われる。そこで若干の諸例を提示しながらこれらの検討を行ない、本節の小括にかえたいと考える。

まず村方役所の裁定に承服できない場合、郡役所へ直訴していることが注目される。例を示す。

i) 浅原村と小栗林村（いずれも西方知行所）の争論。文化 12 年の小栗林村の口上書は次のとおり。

口上之覚

佐伯郡 小栗林村

一 当村与浅原村与去年以来口論出来、御給主様^{（上田氏）}と山所御しらべ之上、論所之内式歩方両村入相、八歩方浅原村一分拌場之儀ニ御差図も被為有候処、村内一統難居合、乍恐当村百姓与市七藏両人

之者郡御用屋敷江御直訴仕、一応御吟味屋敷ニおゐて坂田吉太郎様御直御吟味被為有(和田文書)

「御給主様」の「御差図」では「村内一統難居合」く、郡代官坂田吉太郎の「御直御吟味」を願ひ出たのである。再々吟味まで行ない、堺引案なども出されたが居合わず、最終的には「双方私談」のうえ「御願下ヶ内済」となっている。

ii) 村追放大野口谷尻村武七の直訴一件(大島文書)。理由は不明だが、村方役所より村追放とされた武七が佐伯郡役所へ直訴に及んだのである。これを受けて郡役所は、同村役人へ「当春村追放武七此度直訴一件、郡方吟味役所ニおゐて来ル廿一日迄遂吟味候」と申遣しているが結末は明らかでない。このほかにも個人的な直訴の例はある。

iii) 玖波村の無名訴状の場合(和田文書)。家督相続をめぐる目安訴訟であるが、まことにたどたどしい文字で書かれている。「もとより^(上)うへ田様^(額分)りよふの事ゆへ」、「うへ田様^(役人)やくにん江」願ひ出たが、「もはや四年ニもあいなりそうふニ今もって」埒が明かず、「かような事を御上様^(藩)ニ御すてをきなされ候へバ、じんきニ^(人気)か、わりあしき事やみもうさず、すべてとうじ^(弱)ハゆわいものまけにて、すこしぬるいもの」が勝手なことばかりする。「これがふびんさに、さわたくし^(左)ともが如此ねがいあげたてまつり候、同早々^(どうぞ)々みちつきねがいあげたてまつり候」というのである。「是迄^(上田氏)御給知方より一同遂熟談相続取究り可申旨度々御沙汰有之候得共、小内解合かたく」目安に訴えたのであるが、「無名之訴訟御取上無之御統合ニ候」という理由で却下された。

この三例は直訴が成功したものばかりではない。しかし問題は、直訴がとりあげられたか否かではなく、村方役所に不満があれば、郡役所へ直訴しえたということが重要なのである。すなわちこの場合の直訴は、いわば“上級裁判”を要求したとみられるからである。村方役所と郡役所はそれぞれ独立した機関であり、制度的に上下関係があるわけではないので、直訴した側からいえば藩権力への上訴ということになろう。i)の山論のように、郡役所は村方役所の裁定を覆すこともあったから、実質的には上級機関としての機能を果たしたことになる。但し直訴に及んだ例は極めて少なく、異例のことではあるが、知行所百姓が藩権力へ直訴し、藩がこれを受理し新しい判断を下すこともあったことを重視したいのである。

知行所が割庄屋の組下におかれたこともこのことと関係があろう。郡役所は村方役所が任命した庄屋をとうして支配したと先にいったが、より本質的には、郡役所が割庄屋をとうして知行所を支配したというべきものである。日常的には職掌その他截然と分けられていたことは先述のことに間違いはないが、郡役所——割庄屋ラインの、給人知行権に対する規制の側面として理解されよう。

つぎに村役人の袴着用について(織田文書)。川角村庄屋四郎右衛門は、東城浅野氏から袴着用を免許されていたので、海田市村での寄合に、「袴着用仕私共罷出申候処、割庄屋野村孫兵衛殿沢原八右衛門殿より御申被聞候様者、貴様袴着用ハ郡御役所より被仰付候哉、但シ御給主様限りニ而被蒙仰候得者、此後郡駄へハ一円袴着用相成不申」と、「御用談除キニ」、つまり寄合から除外されてしまった。これでは「私役前差聞申」すのみならず、「袴ヲ不付候而ハ御給主様^(東城浅野氏)へ対し相済

不申」と郡役所へ訴え出たのである。今からみれば兇戯に等しい行為とみられるかもしれないが、幕藩制下の村役人にとってはかなり深刻なことであったと思われる。しかしことは“深刻な”だけではすまないものがある。いささか一般化すれば、分裂支配の一定の貫徹とみられるものがあるからである。²⁴⁾

以上若干の諸事実を指摘したが、これらのことは知行所百姓からみればどうということになるか。小給知の場合、農民の諸願い諸要求が拡散するとかって指摘したことがあるが、²⁵⁾ここでも同じことがいえる。つまり郡役所・村方役所がそれぞれ相手方に願い出るようにいい、互いに自らの責任を回避しようとするわけである。一例のみ示す。

覚

一 去ル巳戌兩年洪水ニ付川土手損所数々御座候而夫積り仕願出申候処、御免許無御座、尤村役人共借りかへ仕夫方八百三十拾壹人遣、半調ニ仕置申候故、少し成洪水ニ而も田地損所ニ相成申、左候而者御給主様申上之品も無御座、往古も田地仕戻し之儀者御給主様も御調来り、土手仕戻し郡方も御調来り之形合も御座候ニ付、御免許無御座様子御給主様へ御覧申上候処、往古も調来り之土手相調不申候而者、田地損所ニ相成、左候而者御屋敷様之愁ニも相成可申候ニ付、早々願出候而相調申様ニ頼入可然様ニ被仰付候……(中略)……

(川角村)
庄屋 四郎右衛門

子 五月
(安芸郡 割庄屋)
野村 孫兵衛 殿

(「文政寅年と天保申迄諸書付扣帳」一織田文書)

田畑は給人、土手は郡役所という慣行があるにもかかわらず、²⁶⁾農民の要求が実現しない事情をはっきりと読みとることができるであろう。「御郡方へ歎出候得共埒明不申」こと、またその逆のことを示す史料は決して少なくないのである。

農民諸要求の拡散は、また分裂支配の貫徹ということでもあるが、先に関説した如く、農民が逆にこのような支配のあり方を利用して、諸要求を実現させようという動きを示していることも多い——とりわけ年貢関係において——。しかしこれらについての検討は別の機会に譲らなければならない。

〔註〕

- 1) 以下において家中(家老を含む)の家司・家人をまとめて家臣、藩の直臣を家中とする。
- 2) この史料は書上げられた家臣名からみて、ほぼ正徳～天明期のものと思われる。なおこの史料については松平秀治・土井作治・鈴木幸夫氏のお世話になった。
- 3) 備後福山藩水野家老小場氏(知行高1,000石)は、元禄ころ切米取34人・扶持米取55人を召抱えており(東京都小場氏蔵「定積」)、尾張藩では4,000石の家中は家老以下59人の召抱えが義務づけられていたが、その中には代官・吟味役・蔵奉行などをみることができる(林氏前掲書 p.45)。
- 4) 上田主水自ら借金のために度々上坂(洛)し、また上方商人からの借銀も多い(三原市立図書館蔵「安政二年大坂御借財帖」)。これについては別稿に期す。なお前節註17)参照。
- 5) 史料上ではすべて「村方御役所」と表現され、「御」を付すのが正式名称か否か明らかでないが——たとえば郡奉行を郡御奉行と正式に改称した例もあるので——、以下では村方役所と称す。

- 6) 小方村御用留（和田文書）は、郡方にかかわることは「郡用諸事控」、知行所に関することは「頭庄屋諸控」「御知行所諸控」として別帳に仕立てられ、前者は必ず割庄屋、後者は頭庄屋として記載している（後述）。ただし川角村（須山文書・織田文書）では別帳でないこともあるが、知行所の存在形態乃至規模の差異によるとみられる。
- 7) この系統図は、諸史料から諸職名を拾い出して構成したもので、今後あるいは補訂の必要があるかとも思われるが、大雑把にはこのようにいえると考えている。先に註記した如く、さしあたり年代は考慮の外におかれているので、支配の諸面画が確定できれば、若干変動する可能性はある。なお村方役所の下役は煩雑になるので本文に記した。
- 8) 以下においていちいち出典を註記するのは、あまりにも煩雑になるので、特別の場合を除いて註記を省略する。上田氏関係はおおむね和田文書（主として「郡用諸事控」「頭庄屋諸控」「御紙方諸控」「小栗林村諸書付控」「旧記書抜」「永代記」「覚知録」など。なおその全貌は、広島県立図書館編『広島県史料所在目録第2集』をみよ）、佐伯郡大野町 中丸芳氏・大島恣氏所蔵文書、三原市立図書館蔵「御用向日記」「御公用日記」（全貌は『三原郷土資料17集』の目録をみよ）、上田宗雄氏所蔵文書。東城浅野氏関係は安芸郡熊野町川角 須山義夫氏・織田信氏所蔵文書（「御触状控帳」「御屋敷様上控」「諸書付控帳」など）などである（なお全貌は広島県史編纂室編『広島県史料所在目録 安芸郡』をみよ）。なお引用史料のみ出典を本文に示した。
- 9) 村役人の呼出状写は、上記諸史料中に無数にあるが、天保7年「当用日記」（大島文書）中の村方役所からの呼出状の1通の奥に、「私曰、右ハ村方御役所御呼出しニ付広島指屋旅宿へ至来」というメモがあることから明らかである。なお前掲「御履歴井御家政概略扣」に「一、村用役所 一個所 佐伯郡宮内村ニ在り、役員五人」とあり、呼称は相似ているが、村方役所と村用役所は別のものである。
- 10) 史料的には「六町目村吟味屋敷」ともでる。ここに上田主水の下屋敷もあり、現在の鷹野橋〜大手町辺りである（「天明年間の広島城下絵図」―「新修広島市史」付録一参照）。
- 11) 高田・世羅・三谿・奴可・三上郡の知行所の科人を入れる牢屋は奴可郡栗田村におかれた。
- 12) 上田氏の御建山の山守で万治ころから始まった。給米は古来1石、享保4・5年より1.5石。
- 13) 「郷邑記」（『大竹市史』史料編第1巻所収）。
- 14) 前掲「浅野越前侍帖井目印」。
- 15) 拙稿「近世初期における柵の統制」（『史学研究』103号）。
- 16) 永井弥六氏「所務役人について」（『芸備地方史研究』77号）所収の“広島藩諸郡所務役人・頭庄屋支配高村組分け表”に家老知行地をあてはめると、所務役人が40人中18人、頭庄屋は81人中37人が蔵入地から、残りが入会い知行地から任命されており、家老知行地のうち丸給知からは1人も任命されていない。なお同稿によると三原浅野氏の知行所には所務役人・頭庄屋ともおかれなかったことが指摘されているが、興味深い事実といえる。
- 17) いうまでもなく単なる呼称の変化を追うことを目的とするのではなく、このことを明確にすることが、給人知行権に迫るひとつの方法と考えるからである。
- 18) 「郷邑記」（『大竹市史』史料編第1巻）によると、小方村「庄屋孫右衛門御入国以来代々頭庄屋筆頭也」と、すでに元和ころから頭庄屋が存在したように記している。しかしこのときは庄屋（里正）であり頭庄屋ではない。
- 19) 川角村は府中村（安芸郡）と杵原・高屋堀・溝口村（賀茂郡）の5ヶ村で1組とされ、村方役所からの触書類はすべてこの5ヶ村宛にされているが、川角村からの諸願いはすべて同村から直接村方役所へ差出している。5ヶ村を単位とする頭庄屋は認められない（須山・織田文書）。この理由は川角村以外は入会い給知であること、および高屋堀村と杵原村は隣接しているが他はがかなり隔たっていることによっていると思われる。但し上田氏の場合は後述のように郡を越えて頭庄屋がいた。
- 20) 以下交通に関しては後藤陽一氏「広島藩の駅制について」（『芸備地方史研究』41・42）に負うところが多い。

- 21) 詳しくは畑中誠治・隼田「近世初期における加子役の成立と市場構造」(福尾猛市郎編『内海産業と水運の史的研究』所収)をみよ。
- 22) いうまでもなく府中村はそれらの書き上げの中に含まれている(入会い知行地だから)。
- 23) 時たま不適用のことが註記されていることもある。たとえば「戸坂川角両村之儀者御家老様御給知=付御給主御用相勤候=付除ク」(安芸郡坂町児玉氏蔵「郡方御跡書帳」)の如く。
- 24) 佐伯郡割庄屋の寄合で割庄屋頭庄屋兼帯の小方村吉左衛門が、袴着用について全く同じ理由で他の割庄屋から疎外されている(和田文書)。
- 25) 拙稿「知行地の構成」(福尾教授退官記念事業会編『近世社会経済史論集』所収)。
- 26) たとえば大風の注進に「~~川~~角村庄屋から村方役所へ「此度不意之大風ニ付、稲作并畑作諸作共不熟仕、百姓共極難渋ニ罷過居申候、尤家并木類者こけ不申候」と上申している。同じ日付の安芸郡割庄屋への注進には怪我人の有無だけである。両役所の職掌が知れるであろう(織田文書)。

4. むすびにかえて

およそ「支配構造」を問題としようとする以上、支配される側の問題、すなわち村落構造や農民——本稿でいえば知行所百姓——の諸動向が検討されなければならない、それに対する支配の論理——本稿でいえば給人法を中心とする諸論点——の提示が必要であり、かつ何よりも支配と被支配の矛盾が集中して表現されるであろうところの、年貢搾取に関する諸問題を究明することが不可欠のことといわなければならない。しかし最初に断っておいたように、年貢に関しては別の機会に述べる予定であるために、本稿では若干の指摘にとどめ、具体的なことについては故意に言及することを避けたので、不十分であることはいうまでもない。しかも当初、本稿の第4節として予定されていた、「給人法について」を全文にわたって、また第2・3節においても——とりわけ史料や表——部分的に、ともに紙幅の制約によって割愛せざるをえなくなったことが、ますます本稿を不十分なものとしている。そのためにむしろ「支配機構」と題した方がより内容に近くなる程度のもとなり、わかりにくい点も少なからずあらうかと思われる。それらについては今後の課題とする以外にないが、意のあるところをお汲みいただければ幸いである。

にもかかわらずわれわれは、家老知行地の支配構造、すなわち給人知行権の内容を、かなり具体的に明らかにしえたと考える。それらを要約してみる興味はもはやないが、少なくとも大名知行権のもとにおける給人知行権という場合、まず家老と一般家中にわけて考えるということの妥当性は、了解いただけたのではないだろうか。村方役所を中心とする家老の知行所支配は、小給知に比べてはるかに強大な権限を行使していたのである。年貢搾取・裁判警察権・村役人任免権をもち、これを行使するに相応しい陪臣団(=暴力装置)と村方役所(=支配機構)をみれば、その幅と深さは、郡役所の知行所支配よりも広いひろがりや深みをもっていたかにもみえるごとくである。

しかしながらわれわれは、家老の知行所支配が、大名知行権を排除乃至峻拒するほど強大であったなどというのではない。それはあくまで藩権力が許容する範囲内にとどまる。

上の「小括」でも述べたが、この点はたとえば大名が知行所の割替権を掌握していたこと、——寛永以降実際には発動されなかったけれども——、また恒常的な「減石」「上ヶ米」などを考えれば、あまりにも明らかなことであり、その意味では幕藩制下の地方知行制は、その初発から大名知行権が給人知行権を包摂していたともいうことができよう。給人法も——触れる余裕はなかったが——さまざまな独自性をもつとはいえ、基本的には藩法の枠内にとどまり、決して藩法に優位し、それを否定するような内容をもつものではないのである——だからといって給人法の検討が無意味であるということにはならない。独自性の析出が知行権の内容確定のためにもむしろ重要でさえある——。

ただ如上の諸事実が示すところによれば、中期以降の幕藩制史研究においても、知行制の観点をもち込む必要があること、さもなくばたとえば、農民の多面的な諸要求について、知行制が如何なる規定性を与えたか（乃至はその逆）という視点が欠落し、一面的な理解に陥る可能性があるのではないだろうか。したがって幕藩制下の地方知行制は、決して寛文・延宝期で研究の終止符をうつべきものではなく、改めて全過程を通して検討されるべきであるということなどが、本稿におけるわれわれのささやかな主張にすぎない。

〔付記〕 本稿は後藤陽一先生を研究代表者とする昭和47年度総合科研「瀬戸内海地域における豪農・豪商の史的研究」による研究成果の一部である。